

観
察

清 水 光 子

七夕さま

端午の節句ははじめての楽しい年中行事にしても何といつてもまだ入園間もなく、思ふさま幼稚園の行事を楽しむわけにゆかなかつたやうであるがもうこゝまでくれば幼稚園生活が身についてくる。充分楽しい七夕祭りをしたいものである。お話、手技の方で一々の細かいことは書き盡されることであるから、観察としては、どの子どもにもお仕事を分擔させること、たゞみてるばかりにしないでやらせるやうに注意することにしなさい。

水

水なんか、しよつ中みてゐるし、いちつてゐるではないか、まして水遊びでもさせたら後始末が大變……と叱られさうである。けれどあまり近いものは知らないといふ一つの例にも引けさうでもある。暑い折であるから特に水を澤山使ふ、それを一寸観察といふまでのことにはないがその心持でしてみたまゝを書いてみよう。

(一)粘土遊びの手を洗つてゐる子ども、始めは普通に洗つてゐたものが段々水をたゞ出して流すことに興味をもつてしまつて、ちやあ〜と出してゐる。「靜に洗ひませうね」言つても、一寸はきいてもすぐ栓を一ぱいに出して勢よく四方に廣がるのを樂

しんでゐる。前掛もはやびしよ〜である。「さあよませう。細く出して洗つた方がごんなにお前掛をぬらさないでいゝのよ、ほらこうしてみませうか」と粘土遊びに使つた古いわり箸を栓の口の所にあて、水を細く出して靜にお箸をつたはらせて手にかけてやる。あとから洗ひに来た子どもにお互に斯うしてかけて洗はせる。

(二)暑くなつたら砂遊びであまりよこれたハンカチやエプロンなどざつと洗ふのに、小さい入れものに水を張つて窓に出しておき、日向水をつくつておく。それは寒い日本を作つてみるのと同様に、そして出来ればガラス板をのせておく。「汚れたハンカチなどまとめて洗ひませうね。」と言ひ乍らみんなにみえるやうに「ごんなに水たまたがついてゐる。」「ずる分暖かくなつてゐますよ。」と言ひ乍ら汚れものを入れる前手を洗ふのに日向水をかけてやる。「どの位になつてるかはかつてみやうかしら」と言つて始めはたゞの水に、次にこの日向水に寒暖計を入れてみる。これは幼児に説明や、一々みせることをしないで私の獨り語のやうにしにする。みたいといふ子どもにはたゞみせる。

(三)鉢に薄いた朝顔に水をまく。如露に水を入れたのが少し殘つた。お砂場にまきませう。太陽を背にして「こちらへ来てごらんなさい。」と先生に竝んで立たせて人造虹をやつてみせる。もう一ぱい二はいおまけに水を砂場にまき乍ら。

(四)水が低い方に向つて流れてゆくことが不思議でどうしてかとしきりにきく子どもがあつた。「どうしてかしら」と先生も不思議さに共鳴して首をかしげたことであつたがその考へ至つた原因

は、雨上りのお庭のたまり水の排水工事(?)を子どもも手傳つてしたからの事である。たまつた水をマンホールへとシャベルで土へみぞをつくつて導いた。何本も枝を出した川のやうな形にして。手は汚れたけれど楽しい仕事であつた。途中で流れが何度も止つてしまふその度に、次々に低くして流してゆく。すつかり流れたあとにはみぞを埋めておいた。

夏の雑草

ひろがほは園藝からいふと全く困つた雑草だと大岩先生がおかきになつていらつしやる。とつてもとつても後から生えるしすく根を張る。せいよくとることにしやう。葉の形を知らせてこの草はどつた方がいゝ事を話す。若し花が咲いてゐるのがあつたら幸、さつそくとつて一輪さしにでもさしてみる。切紙や、寫生の材料にしても可愛い。朝顔に花も葉もよく似てゐるひろがほといふ名を教へる。つゆ草も可愛い、出来る丈畑の爲には取り、取つたものは少しおまゝごとのお家をかざつたりごちそうにしたりする。もう赤まんまも咲いてゐる。これもよいごちそう。すぎなもどこつないだかのあつこ遊びをしたりし乍ら除草に協力しやう。

野菜

みんまで蒔いた野菜がそろそろ収穫出来るものがある。何でもよい、一つ二つでもよい、穫れたら本當にうれしいその氣持をみんんでみ乍ら話し合ひ乍ら繪にかく。といふより新鮮な美しさは繪心のない私にかいてみたいと思はせる。

せみ、とんぼ

わざ／＼もちぎなをふりまわしてせみ取やとんぼ取りをなしく

てもいゝけれど蟲とりあみはあつてもよい。そして捕つた蟲は、かねがね言はれてゐることであるけれど、羽をいだり足を取つたりしてみせるのはよしたい。そうまででなくても羽が何枚、足が何本といつてわざ／＼教へないで、羽や、足などのことを特に知らせ度いならば他の蟲と比べてちがひをみつけ出させるやうにし度い。

談話

安村ふさ

梅雨もからりとあけて暑い夏になりました。お話も今月は保育室の中に於て丈でなく、園内の涼しい木蔭等で随時話したいものです。今月、系統的保育案の實際に豫定されてゐるお話は、七夕様、支那事變記念日の話、人形山名鐵雄君の出征、へうたんラッオ、浦島太郎、八岐の大蛇、雪の御殿であります。

七夕様 七夕祭は此の頃都會では餘り行はれませんが、地方によつては大變盛大に致す所があります。牽牛、織女の話も、地方によつて趣きを異にしてゐるかも知れません。それ／＼其處のこども達に親しい趣きにお話なさるのがよろしいと存じます。お話のもとの意を特に狂げる事はありませんが、こども心にびつたりと來る様なことばで話したいものです。そして又單なる二星の傳説として丈でなく、天の川の事から天體の運行、星座の事など、極く／＼簡単に、問答の形式でも話し、夜空に燦く星を通して